

かぐや姫昇天の前後をめぐって

安 藤 重 和

—

五人の貴公子の執拗な求婚を拒み通したかぐや姫は、彼女に強く心引かれながらも強引な形の結婚はあきらめてくれた帝と

文通を行い「御心をたがひに慰め給ふ」形で「三年ばかり」過

ごし、「春の初めより、かぐや姫月の面白う出でたるを見て、

常よりも物思ひたるさま」となった。「月の顔見るは忌む事」

と傍の人が制止しても、「ともすれば人間にも月を見てはいみ

じく泣き給ふ」有様で、月日の経過と共に姫の「物思ひ」は激

しくなるが、姫は「物思ひ」の原因を誰にも話さない。だが

「八月十五日」が間近になった頃、ついに、翁夫婦に告白する。

さきくも申さむと思ひしかども、(翁夫婦ガ)必ず心惑

はし給はむものぞと思ひて、今まで過ごし侍りつるなり。

さのみやはとて、打ち出で侍りぬるぞ。おのが身は、この

国の人にもあらず、月の都の人なり。それをなむ、昔の契

り有りけるによりなむ、この世界にはまうできたりける。
今は帰るべきになりにければ、この月の十五日に、かのも
との国より、迎へに人々まうで来んず。さらずまかりぬべ
ければ、(翁夫婦ガ)おぼし歎かむが悲しき事を、この春
より思ひ歎き侍るなり。

姫は、「八月十五日」に「月」に帰還せねばならぬことを告げ
るのであるが、その「月への帰還」を翁夫婦との関連でのみ把
えている点に注意しよう。それを秘し続けて来たのは「(翁夫
婦ガ)必ず心惑はし給はむものぞ」と思ったからだと言うし、
「この春より思ひ歎」いていたのは、「さらず(月へ)まかり

ぬべければ、(翁夫婦ガ)おぼし歎かむが悲しき事」を思った
からであるという。又、姫はこれ以後も「月への帰還」の件を
翁夫婦以外の人に告げようとはしていないことにも留意しよう。

そして、翁は「月への帰還」を告白して「いみじく泣く」姫
に對し「竹の中より見つけ聞えたりしかど(略)養い奉りたる
我が子」であると親子関係を確認し、『我こそ死なめ』とて「

「いと堪へ難げ」に「泣きのゝしる」という極めて強い反応を示す。姫も、「月の都」に「父母」がいるが、「久しく遊び聞えて慣らひ奉」った翁夫婦の方にこそ親しみを感じているのだ、と応じて、翁夫婦との親子関係を強調する。こうして、互いに親子関係を確認し合った姫と翁は、「(姫ガ) おのが心ならず、(月へ) まかりなるとする」事態に対し、親子関係を破壊するものとして、「もろともにいみじう泣く」のであり、これに付随して、「使はるる人々も、年来慣らひて(略) 同じ心に嘆かしが」る形で、姫と翁を中心に「使はるる人々」も含めての一体的な嘆きの世界が構成されるのである。

だが、帝はこの嘆きの世界に入って共に嘆くという行動はとらない。「この事を御門聞し召して」帝自身が姫の許へ跳んで来るかと言えそうではなく、「竹取が家に御使つかはさせ給ふ」のみであり、しかも、その「御使」が「仰せ言」として翁に伝えた言葉は次の如きものであった。

いと心苦しく(翁ガ)物思ふなるは、まことに

これは、翁の苦悩を見舞っている言葉であり、姫が月へ帰らねばならぬことを直接に嘆いている言葉ではない。又、「御使帰り参りて、翁のありさま申して、奏しつる事ども申すを、聞き召してのたまふ」帝の言葉は次のようなものであった。

一目見給ひし御心にだに忘れ給はぬに、明け暮れ見なれたるかぐや姫をやりて、いかが思ふべき

かぐや姫を「一目見」ただけの帝自身と、「明け暮れ見なれた

る」翁との差を考え、かぐや姫を(月へ)やった時の悲しみは、自分よりも翁の方が強いであろうと考えて、翁に同情している。つまり、かぐや姫との関係において、翁に一步譲った立場を取っている。故に、翁を押しつけて自分こそが前面に出てかぐや姫の昇天を阻止しようとも考えない。なるほど、帝は八月十五日に、「司々に仰せて、勅使、少将高野の大国といふ人を指して、六衛の司あはせて二千人の人を竹取が家につかは」したのであるが、それは「この十五日は人々、賜はりて、月の都の人まうで来ば、捕へさせむ」という翁の軍勢派遣要請を受け入れてのものであった。

姫の昇天を阻止しようと前面に出て直接必死の行動をとるのは姫の親である翁であり、帝は翁の阻止行動を翁の背後で援助するという形である。それは、八月十五日当日、姫を天人から守るべく必死に行動した翁に対し、姫の昇天の現場に姿すら見せず二千人の兵士達に阻止行動を委ねていた帝、という形で語られているのと同趣である。以前、かぐや姫の顔を見る為程度の目的で「御かりみゆき」を設定した帝であることを思えば、今回も行幸設定が不可能であったとも思えない。例え、事が夜間に及ぼうとも、帝が夜間同寝守護すべき剣・璽は行幸の際陪伴されるので支障にはならない。

又、翁は、「この事(姫ガ月へ帰還スルコト)を歎くに、ひげも白く、腰もかがまり、目もたゞれにけり。翁、今年は五十ばかりなりけれども、物思ひには片時になむ、老になりにける

と見ゆ」という激越な悲嘆に落ち込んで行つたのだが、帝にそうしたことがあったようには書かれていない。

姫は月への帰還の件を翁夫婦以外には話そうとせず、又、帝が翁達の嘆きの中に積極的に入り込んで行くこともしないことにより、姫の昇天は姫と翁夫婦の問題として「親子の別離」という側面がクローズアップされる形で語り進められて行くのである。では何故、帝は姫を天人から守るべくもつと積極的な行動を取らないのであろうか。

二

帝は、姫との強引な結婚は諦めたけれど、「なほ（かぐや姫ヲ）めでたくおぼしめさるる事、せきとめ難し」とか「かぐや姫のみ、御心にかゝりて、たゞ一人住みし給ふ」とか描写され、かぐや姫に強い未練を残していた。だが、姫は帝に再び顔を見せようとはしなかった。

（帝ハ）かぐや姫の御もとにぞ、御文を書きて通はさせ給ふ。（姫ハ）御返りさすがに憎からず、聞えかはし給ひて、面白く、木草につけても御歌をよみて、つかはす。かやうにて御心をたがひに慰め給ふ程に、三年ばかりありて、

（姫ノ昇天ノ年トナル）

帝から「御文」が来ると、それに対し受身的に「御返り」をさし上げるのみの姫である。文通によって「御心をたがひに慰め

給ふ」だけの関係は、「三年ばかり」にわたっても、全くそれ以上の進展を見せなかった。「御返り」を「憎からず」「聞え」「面白く、木草につけて」御歌を詠み、この文通で姫の心も「慰め」られているところを見ると、姫は決して帝を嫌っているわけではなさそうなのに、ペンフレンド以上の関係へ発展させようとはしないのだ。

この姫の消極性の理由は、姫が昇天直前に帝に書き残した手紙の中で、次のように述べられているところから推量できよう。

かくあまたの人を賜ひてとゞめさせ給へど、許さぬ迎へまうで来て、（私ヲ）取りゐてまかりぬれば、くちをしく悲しき事。宮仕へ仕うまつらざるぬるも、かく煩はしき身にて侍れば。心得ずおぼし召されつらめども、心強く承らずなりにし事。なめげなる者に思し召しとどめられぬるなむ、心にとまり侍りぬる。

ここに、姫が「宮仕へ」を拒否した理由が、結婚しても月へ帰還せねばならず帝と終生添い遂げることはできぬ「煩はしき身」である故と明示されている。姫が帝との関係を文通だけにとどめているのも同じ理由であろう。が、同時に姫がその「煩はしき身」であることを秘していたため、帝は姫が求婚を拒み続けることを「心得ずおぼし召され」姫を「なめげなる者に思し召しとどめられ」ていたことも述べられており注目される。勿論これは姫の判断として語られているものだが、「三年ばかり」

にわたる文通の過程などを通して、姫が感じ取ったものであらうから全く的是な判断とも言えぬものと思う。帝が姫に強い未練を持てば持つほど、理由不明のまま「心強く（強情ニ）」結婚を拒み文通するのみで顔さえ二度と見せてくれない姫を「なめげなる者に思し召」すことにもなるのであらう。

姫を強く愛するが故に、結婚を承知しない姫を「なめげ」にも思う帝の心は複雑であり、これが、帝が直接姫を守ったり帝が直接天人と対峙するというのが如き積極行動に出ることにプレッシャーをかけているのだと思われる。姫と帝の關係は所謂「友達以上、恋人未満」の如き段階にとどまっており、帝の行動もそれに比例しているのだ。

三

さて、帝が姫を「なめげなる者に思し召」されるようになっていたのであれば、それは姫にとっては本望ではなかったのか。最初、帝が「内侍中臣のふさ子」を派遣して来た時、「国王の仰せ言を背かば、はや殺し給ひてよかし」と喧嘩を売り、帝から嫌われることで結婚を避けるべく「たばか」っていたではないか。姫の昇天後の帝の悲しみを思えば、姫は帝から愛されてしまふより嫌われる方が、帝の悲しみを軽減できてよかったはずである。姫が帝との結婚を拒み通したのも、二度と帝に顔を見せず文通による心の慰め合いのみにとどめたのも、全て姫が昇

天した時の帝の悲しみを軽減する為であった。

それなのに、姫は、「なめげなる者に思し召しとどめられぬるなむ、心にとまり侍りぬる」と言つて、帝が姫を「なめげなる者に思し召し」ている誤解を解くべく、帝の求婚を拒み通して来た原因を「月へ帰ラネバナラヌ」煩はしき身にて侍れば」と自ら暴露して、自分の結婚拒否は昇天時に帝をして別離の悲しみにひたらせない為の深い配慮によるものであったことを示し、更に続けて、「今はとて天の羽衣着る折ぞ君をあはれと思ひ出でける」という歌を書き付ける。「君をあはれと思ひ出」づとは帝に対する姫の恋情の告白でしかない。

実を言えば、この手紙の件が描写される以前の箇所では、姫の昇天に関して姫と帝が直接に関わり合いを持つ描写はない。つまり、姫の方から積極的に帝に対する働きかけがなされたことはなく、姫は翁夫婦との別離を専ら悲しんでいた。

それなのに何故、昇天直前、「天の羽衣着る折」になつて帝への恋心をこのように積極的に表明するのであらうか。姫がこのようなに激しく地上の男に心を動かしたことはかつてなく、むしろ逆に、恋心を激しく燃やしかぐや姫に求婚して来る男達の心を静める方向で動いていたのに。

四

姫が、「君をあはれと思ひ出でける」時間として、強調的に

提示している「今はとて天の羽衣着る折」とは、どのような性格付けをされた時間なのかを、ここで考えておこう。「きぬ着せつる人は心異になるなりといふ」という姫の言に明らかな如く、今まで地上で人間の心を付与されて生きて来た姫が、人間の心でいられる最後の時間という意味は勿論ある。だが決してそれだけではないようだ。

先ず、「八月十五日」の夜「子の時ばかり」に姫を迎えに来た天人達、その中で「王とおぼしき人」が翁に対して次のように言っている部分に注目しよう。

かぐや姫は罪を作り給へりければ、かくいやしきおのれがもとに、しばしおはしつるなり。罪の限り果てぬれば、かく迎ふる、翁は泣き歎く、あたはぬ事なり。はや返し奉れ。

姫の罪は、彼女が「罪を作り給」うた時から始まっているのであろうが、天人達が「かく迎ふる」のは「罪の限り果て」たからであるというのであるから、天人達が来訪した「八月十五日」の夜「子の時ばかり」の段階では既に姫の罪は消えているはずである。天人がここで「姫ヲはや返し奉れ」と言い、このすぐ後で、「いざ、かぐや姫、きたなき所に、いかでか久しくおはせむ」と言つて、しきりに姫の帰還を急がせているところを見ると、恐らく、「姫ノ」罪の限り果て」と同時に天人達は「迎」えに来たのであろう。「きたなき所」である地上は、「罪の限り果て」た天人の居るべき場所ではないのであって、

罪を終えた姫は直ちに「月」へ帰らねばならないのだと思われる。天人登場の直前部で、姫が「日頃も出でゐて、今年ばかりの暇を申しつれど、更に許され」なかったと言っている如く、罪を終えた天人は、地上での「暇」など「更に」許されず、直ちに帰還する他ないのである。しかし、「天の羽衣」を着せられる以前の姫には、自分を育ててくれた翁夫婦と別れることを悲しみ嘆く人間としての心情が保持されており、地上で翁夫婦との最後の別れを惜しむ時間が不可欠であった。

ここに、「罪の限り果て」自由を得た天人が、にも拘らず、「きたなき所」である地上に滞在するという時間が、天人の側から言えば全く予定外の形で、出現することになった。それは天人達の力の前で、為す術もなくひれふしてしまった人間達の力によるものではなく、かぐや姫が自身の自由意志によって天人達の意図に抗する形で確保していった時間であった。「屋の上に飛ぶ車を寄せ」た天人が、「いざ、かぐや姫、きたなき所に、いかでか久しくおはせむ」と呼びかけた時、姫の足は「飛ぶ車」の方へではなく、「竹取心まどひて泣き臥せる所」の方へ向かっている。こういう形で、天人の予定しなかった時間が確保され始める。又、天人が「天の羽衣」を姫に着せようとするのを「しばし待て」と制止し、更に、姫が帝へ宛てて手紙を書くのを見て、「天人」が「遅し」と「心もとながり給ふ」のについても、「物知らぬ事なのたまひそ」と天人をたしなめ、「いみじく静かに、おほやけに御文奉り給ふ」のであった。つ

まり、「罪の限り果て」た姫は、自由に心を展開させ始めていたのであり、それによって必要になった新たな時間も確保していくのである。姫が強調した「天の羽衣着る折」とは、姫が人間の心でいられる最後の時間であると同時に、自分の心を自由に展開し得た時間でもあった。

姫は、自分の心を自由に展開させて、初めて、「君をあはれ」と恋い慕っている自分の心をはっきりと認識し得たのである。「思ひ出でける」の「ける」の部分を見逃してはならない。(恐らく、「三年ばかり」文通して「御心をたがひに慰め給ふ」うち自覚せぬまま恋心を発生させていたものであろう。)そうすると、恋する帝が自分を「なめげなる者」と思っておられることが心残りとなり、帝の誤解を解くべく帝の求婚を拒み通した理由を明す手紙を書かざるを得なくなったという寸法であろう。だから、姫が、昇天直前に帝に手紙を出すことは、前々から姫が考えていたという形ではなく、翁との最後の別れを終え、天人が天の羽衣を着せようとした段階で、「(帝ニ対シ)物一言、言ひ置くべき事ありけり」と、急遽思ひついた形で語られているのである。当初から姫が考えていたことは翁夫婦と別れを惜しむことだけであった。

だが、このような手紙を帝に届ければ、帝の恋心を燃え上らせることになり、今まで姫が帝の求婚を拒んで来たことも、二度と帝に顔を見せずに文通のみで心を慰め合ってきたことも皆無意味になるのに、帝に対する恋心をはっきりと認識してしまっ

た姫は、その恋心も帝に告白せずに、羽衣を着て「心異に」^{こころ}なってしまうことには耐えられないのだ。姫の理性の限界である。

五

次に、かぐや姫が昇天してしまつた後の場面を見よう。

姫を天人から守るべく必死になつて働いた翁夫婦は、「血の涙を流してまどひ」、「何せむにか命も惜しからむ」と死を願望して、治療の「薬も食はず」「やがて起きもあがらで病み臥せ」つた、という。この翁夫婦に間もなく死が訪れたことは容易に想像できよう。

次に、帝に関する描写を見よう。

中将、人々引き具して帰り参りて、かぐや姫をえ戦ひとめずなりぬる、こまゝと奏す。薬の壺に御文添へて参らす。ひろげて御覧じて、いとあはれがらせ給ひて、物も聞し召さず、御遊びなどもなかりけり。大臣・上達部を召して、「何れの山か、天に近き」と問はせ給ふに、ある人奏す、「駿河の国にあるなる山なむ、この都も近く、天も近く侍る」と奏す。これを聞かせ給ひて、

逢ふ事も涙に浮かぶ我が身には死なぬ薬も何にかはせむかの奉る不死の薬に又壺具して御使に賜はす。

先ず注意すべきは、「かぐや姫をえ戦ひとめずなりぬる、こまゝと奏す」の部分には、それを聞いた帝の反応が何ら示され

ていないことである。かぐや姫が昇天してしまったこと自体は、とり立てていわねばならぬほどの反応を帝に起こさなかったのである。姫が帝の求婚を拒み文通のみの交際にとどめて来たことの成果であろう。これに引き換え、姫から帝へ届けられた「御文」は、案の定、帝に強い反応を起こさせる。「姫ノ御文」

六

はあるまい。

「ひろげて御覧じて」、それが原因で、帝は「いとあはれがらせ給ひて、物も聞し召さず、御遊びなども」停止させたというのである。この「いとあはれがらせ給ひて」とは、姫の手紙にある「君をあはれと思ひ出でける」に呼応する表現と思われ、そこに「いと」という強めの副詞が用いられているのは、姫の手紙によって燃え上がらせられた帝の恋心の強烈さを示すものである。既に昇天してしまっただけで逢えるはずのない姫を、にも拘らず強烈に恋慕せずにはおられない帝は、その矛盾状態に苦しみ、食事もとらなくなり、管絃の遊びなども停止させてしまった。帝は、姫が贈ってくれた不死の薬を、「死なぬ薬も何にかはせむ」と言って全否定し、富士山で燃やさせてしまうが、もし死なぬ事を望む気持ちが少しでもあればこうはしないであろうから、帝の胸中には死にたい気持ちのみが存在している事が知られる。「逢ふ事も」の歌は、「もはや姫に逢う事も無くなり、身体が浮かぶほどの大量の涙を流して悲しんでいる私は、死ぬことだけを望んでいるので、不死の薬は全く役に立ちません」の意であろう。昇天してしまった姫を恋慕して食事もとらず死ぬことだけを願っている帝に死が訪れるのはもはや遠い話で

かぐや姫が昇天直前に帝に書き残した手紙が、帝を確実に死へと導いて行く構図が見えて来た。かぐや姫の昇天阻止の為に翁の依頼に応じて兵士二千人を派遣し翁の阻止行動に助力したのみで自身は阻止行動の前面に出ず昇天現場にも姿を見せなかった帝、帰参した頭中将から「かぐや姫をえ戦ひとめずなりぬる」ことを「こまごまと奏」されてもとり立てての反応を示さなかったらしい帝は、自分の求婚を理由も示さずに拒み続けてかぐや姫が昇天したからと言って、それだけで死まで願うとは思われない。今まで秘していた求婚拒否の理由を明かし帝への恋情を告白した姫の手紙が、帝を死へと導いてしまうのである。

死なずに済んだはずの帝を確実に死の道へと導いてしまった姫、「罪の限り果て」た姫はすぐに又「罪」を作ってしまったのではないか。その「罪」を贖うべく姫は又地上に下されるのではない。

竹取物語の末尾には、そんな可能性が秘められている。

注 竹取物語の本文は、松尾聰氏著『校注竹取物語』（等閑書院 昭61・

4 訂正増補）に拠る。但し、私に表記を改めた箇所がある。なお、

拙論「かぐや姫の贖罪譚——竹取物語を貫流するもの——」(本誌、38集)を参照されたい。